〔美術館員随想〕

欧米人の日本文化研究をめぐって

当館次長　成瀬不二雄

かつて欧米人の日本文化についての知識は、ほとんど「フジヤマ、サクラ、ゲイシャ・ガール」程度でした。もちろん、太平洋戦争以前でも、『源氏物語』を原文から直接英訳したり、天平彫刻についてのすぐれた著書を残した欧米人はいましたが、それは例外で、一般の欧米人はまず日本の文学や美術に興味を持ちませんでした。

ところが、最近では世界各国で日本の文学や美術についての関心が深まり、大学で日本語や日本文化を学ぶ学生がふえたばかりでなく、日本に興味を持つ一般人も多くなってきました。ちなみに、私が若い学芸部員として大和文華館に入った頃では、日本語を話す欧米人はまれで、一部の専門家ですら英語の文献だけで日本文化を勉強していました。

しかし、最近では日本文化を学ぶ留学生のほとんどは、前もって故国で日本語を勉強してから、わが国にやってきますし、日本語の文献もかなり読みこなすようです。そればかりか、観光のために来日する欧米人でさえ、たとえ片言でもわれわれと日本語で話そうとしますし、英語しか話せない場合でも、居丈高にまくしたてることはなく、われわれにわかるように、ゆっくりと遠慮がちに話します。ところが、そのような外国人の日本文化研究者や愛好者に対するわれわれ日本人の態度は、旧態依然たるものがあるようです。

たとえば、歌舞伎や文楽を愛好し、そこにおいて使われる古い日本語をよく理解する外国人（特に欧米人）がいたとします。そのとき歌舞伎や文楽の専門家は別として、たいていの日本人は、「外国人なのに日本の伝統文化に理解が深いのは感心だ」と言います。特に欧米人にとって、日本語を学ぶことがなかなか難しいことを思うとき、「感心だ」という評言は確かに当たっているでしょう。しかし、そのあとに、これまた必ずと言ってよいほど、「われわれは日本人なのに、日本の伝統文化について何も知らなくて恥かしい」という言葉が続くのを聞くとき、私は何か違和感を覚えるのです。

ちなみに、アメリカにおける日本文学研究の権威であるドナルド・キーン先生の談話が、かつてある新聞に載ったことがありました。すなわち、キーン先生が文語体の古文を理解し、しかも続け字で書かれた文章を読みこなすと知ったとき、たいていの日本人は、自分にそれができないのは日本人として恥かしいと言うが、私はたとえ外国人でも、日本文学の専門家なのだから、それができて当たり前だと言われたことがあります。

元来専門家というものは、国籍のいかんにかかわらず、そういうものだと私は思います。逆に、日本人の学者で、一般のイギリス人以上にシェイクスピアの戯曲を理解したり、ふつうのフランス人よりも印象派絵画について詳しい人を私ですら何人か知っています。これについて、イギリス人やフランス人は、「東洋人なのに感心だ」とは言うかもしれませんが、「自分はイギリス人（あるいはフランス人）として恥かしい」と果して言うでしょうか。

たとえば、ここに医師と銀行員がいるとします。そういう人たちが、もし日本の文学や美術に関心を持ち、趣味として研究しているならば、それは本業のさまたげとならない限り、すばらしいことでしょう。しかし、彼らがその方面に全く知識も関心も持たなかったとしても、患者から信頼される医師であり、実直で有能な銀行員であるならば、それは少しも非難すべきことではありません。

しかし、一般の日本人は、自国の文学や美術について、自分よりも詳しい外国人（特に欧米人）が現われると、自分がその道の専門家でもないのに、「恥かしい」と思うようです。これには長く続いた江戸時代の鎖国の影響があると私は考えています。

鎖国の効用として、日本の国内が平和で、産業、教育、交通が発達したことは、評価されねばなりません。しかし、そのために日本人の国際理解が浅くなり、外国人との率直な交際ができにくくなったのは、大きな短所となりました。また、鎖国により、日本に特殊な文化が育ちましたが、日本人はその特殊性を強調するのに熱心で、それが結局は大陸の中国文化圏に負うところが多いことを余り意識しようとはしません。たとえば、禅、茶道、華道などに見られる精神主義らしきものが、必ずしも日本独自のものではなく、中国文化に基づくことを考えようとはしないようです。

また、かつて欧米に「禅ブーム」がおこったとき、多くの日本人は、それをキリスト教を根幹とする西欧の文化が行きづまったため、東洋の精神主義に救いを求めたものと受け取ったようです。それは確かに一面の真実を物語っているかもしれません。しかし、西欧のキリスト教文化というものは、われわれ日本人が考えるよりも、はるかに根深く、また強力なものであって、西洋文化の指導精神としての地位は、いまなお全くゆらいでいません。

一方、自然科学に基づく技術文明が、欧米を中心として発達したため、西欧の文化が物質的で、東洋のそれにくらべて精神性に乏しいとみる誤った見解が今なお絶えていません。美術の世界に例を取りますと、ルネッサンス以後のヨーロッパ絵画の迫真的表現に対して、一般の日本人の多くは「まるで写真のようだ」と言って感心します。そして、それが自然科学的な視点に基づくすぐれた技術だとしか考えません。そして、極端な場合は写実性に拘泥する西洋絵画が、精神主義的な東洋のそれとくらべると、物質的だという謬見に陥ることがあるのです。

私は西洋美術の専門家でない上に、西洋の文化一般についても全くの素人です。しかし、元来西洋自然科学も、西洋美術の写実主義も、単なる技術ではなく、壮大な世界観であり、しかもその世界観の基盤はキリスト教だと考えています。たとえば、西洋美術における写実主義は、「物質的」どころか、神の創造されたこの世界をできるだけ忠実に追体験したいという精神主義に基づいているのではないでしょうか。

ところが、われわれは「物質的」だと見なしている欧米人が、「精神的」な日本文化に興味を持ち、言語の障害を克服してそれを学ぼうとするとき、欧米人に対する劣等感の裏返しとして、「どうせ外人にはわからないだろう」という優越感を抱きます。しかし、彼らの日本文化研究が相当のものだと感じたとき、自分がその道の専門家ではないのに、「日本人として恥かしい」と考えるようです。そして、自分のほかに日本人の専門家までを自分と同一視して、「外人」の方がずっと日本の文化をよく知っていると結論づけてしまうのです。このような「鎖国的」な感情は早く卒業しなければならないと、私は考えています。

最近、日本人が長く英語を学んでいるのに、英語が話せないのは日本の英語教育が実用的でないからだし、また中学校から始めても遅いので、小学生から英会話を教えるべきだという意見が強いようです、これについて、小学生に英語を教えることの可否、あるいは英語が本当に国際語なのかという問題はここでは問いません。しかし、この意見の根底には、「英語を話すことによって、日本人は国際化できるのではないか」という日本人らしい安易な楽天性がうかがわれるのではないでしょうか。

季刊 美のたより №118
平成９年２月 20 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.